



「音階は必ず片手ずつ練習する」と述べたが、多くの教師が実践するような両手同時の何オクターヴにもわたるユニゾンでの音階練習は、ヤンケの主張によれば全く意味がない。なぜなら「音階奏での腕と手、指の繊細な個々の動きと、複合の動きを丁寧にコントロールすること」は、両手同時には全く不可能だからである。これを無視して単に何オクターヴにわたる音階をユニゾンで上下に走り回る「繰り返し練習」は、指の筋肉トレーニングに他ならない。このように、真のテクニクという観点では根拠のない反復練習を、ヤンケは強く批判した。丁寧に9音のグループを順次繰り返すことによって、音階の練習を完璧な形で行うことが可能になる。

4. 鍵盤と手の構造の関係について、ヤンケが論文草稿の最初に述べているように、鍵盤は普通に見ると左右対称形ではない^[34]。左右対称である手と、そうではない鍵盤のこのような構造は、両手で音階を奏する場合に特別な困難を招くが、このことを踏まえた上で音階を練習するための重要なポイントが1つある。つまり左手と右手が左右対称形になる鍵盤構成で（次頁の鍵盤のイラスト参照）、左右別々に音階を練習するのであって、慣習的に常に同じ調性の音階をユニゾンで練習するよりも、よほど大きな効果が得られる。これはヤンケが練習の際に大きな価値を置いたメンタル・トレーニングにおける脳の活動と深い関係があり、このように左右の脳を駆使して運動のトレーニングを行うことの有用性は、

34 関連記事 p.20。